

「新しい街づくりを考える」(東日本大震災を受けて)

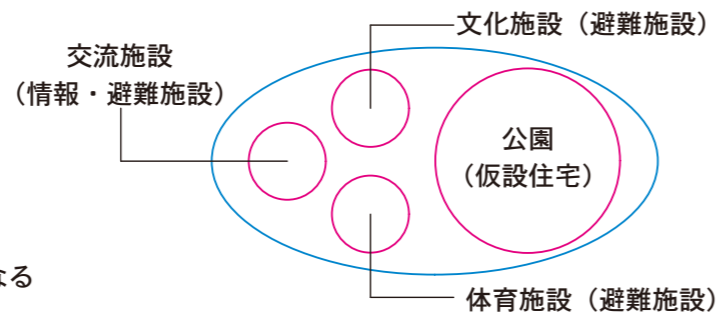
東北日本大震災は甚大な被害をもたらし、青森県においても八戸市を中心に大きな被害を受けました。私たち建築家にとっても、建築・まちづくりに対する考え方を考えざるおえない状況にあります。特にまちづくりについては、ハード・ソフト両面から考え直す必要があるように思います。3・11以来、復興支援・被災地調査を続けていく中で、いろいろなことが分かってきました。ひとつには、被災地域ではその地域の人々でなければ復興計画ができないということです。その地域の風土、生き様、習慣は、各地域で違いそれを知る地元の建築家でなければ、まちづくりは難しいということを感じました。(同じ青森県でも南部藩、津軽藩という歴史風土の違う地域が存在する)もうひとつは、その地域での助け合い、コミュニケーションがいかに大切かということです。防災訓練、ふれあい活動が、いざという時に非常に役立つと思います。自然災害は地球温暖化によりますます増える傾向にあります。地震、津波、台風、竜巻、2050年を見据え、災害に強いまちづくりを考えてみました。

災害時には人と人の助け合いが大切であり、風土・歴史を背景に地域ごとに交流可能な多目的施設が必要と考えます。

○地域の交流施設を防災・情報の拠点に

1. 東日本大震災で学んだ1番大切なことは地域のコミュニケーションづくりです。
2. 地域の風土・歴史に配慮し、地域ごとに交流施設、文化施設、体育施設を集約、防災・情報・避難拠点に
※体育館の避難所ではプライバシー、トイレ、電気、暖房、情報不足、様々な問題が露呈しました。

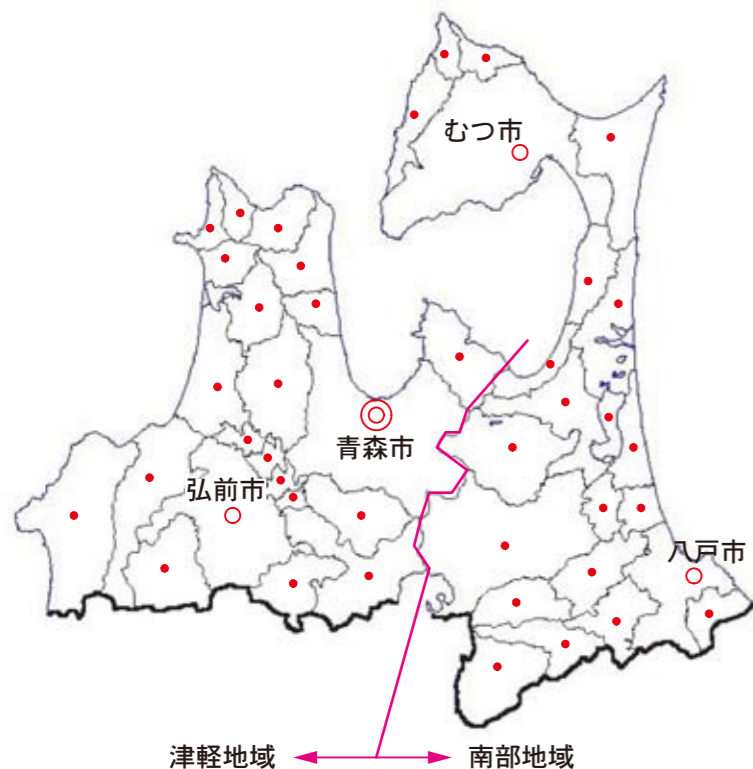
- ・情報の安定化
- ・防災用品の備蓄
- ・発電機設備の設置
- ・仮設住宅が建設可能な公園の併設



防災・情報・避難拠点のイメージ図

○県の情報施設の設置

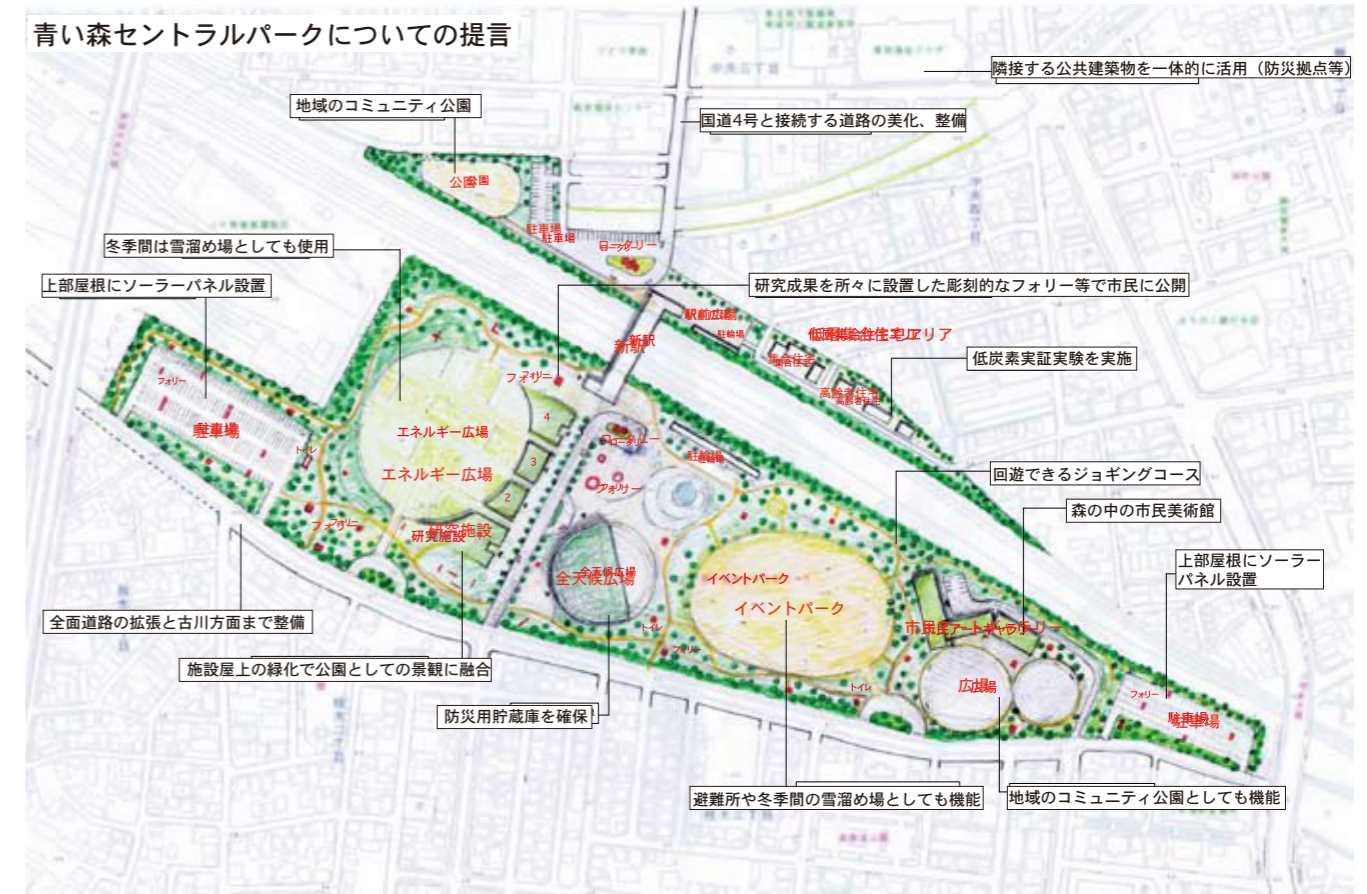
各町村の避難施設とのネットワークの拠点となる



青森県は歴史的に南部と津軽に別れ、風土も習慣も違います。それぞれの中心地域に防災・情報拠点を配置

- ◎ : 県の防災・情報・避難拠点
- : 津軽地域の防災・情報・避難拠点
- : 南部地域の防災・情報・避難拠点
- : 南部地域の防災・情報・避難拠点 (むつ)
- : 各町村の防災・情報・避難拠点

私たちは現在青森市の公園の提案を行っています。防災・科学・自然・芸術の観点から未来型公園を提案し、災害に強いまちづくりの活動を始めました。



現在、市民が多目的に利用し、防災拠点も兼ねる青い森セントラルパークは名実ともに公共の公園です。この公園のより有効な活用法について、『市民による、市民の為の未来型公園 (科学、自然、芸術の融合)』を提案します。

基本的には、様々な世代の人々が集まって楽しむことができる、緑があふれた公園として、かつ災害時には防災拠点として中心的な役割を担える機能を持った場所として整備されるべきだと思います。しかし、それは「公」の手による整備という従来の形ではなく、近年の『市民の手による街づくり』という視点にたって、多くの市民が関わって持続的に整備し、維持されていくものが、ここにはふさわしいと考えています。

具体的には、市民によって植栽、植樹等の長期的な計画を作成、実施し、その維持を行ないます。「公」任せではなく「自分の手で公園を育てていく」ことで、人と関わる機会を得、地域のコミュニケーションを育むことにつながっていくと考えます。それが、これからのまちづくりにとって重要であるということは、東日本大震災から得た教訓であり、それを活かしていく責任があると思うのです。

このソフトを実現するために重要なことは、まさにそこに参加する(利用する、憩う、遊ぶ)「人」であり、その「人」を公園に導く移動手段の確保といえます。この公園の北側にある青い森鉄道を活かした新駅建設を中心としたインフラ整備です。車社会からの脱却と既存の交通システムの効率化を目指すことは重要であり、周辺地域、特に旭町地下道路などの再開発と併せ、青森独自の方法を模索するには決して早すぎではありません。

そして同様に、ガソリンに限らず新エネルギー開発のための研究も重要であり、特に青森の場合、克雪のみならず、積極的な雪の利用など、冬期の堆雪場所としての機能を活用して、研究を進めるための施設を公園内に整備することも有効だと考えます。それらの研究施設は、例えば樹木に囲まれた斜面のように、屋上を緑化するなどの工夫によってその存在を軽減し、多目的広場等と一体化します。研究の成果はエネルギー研究に連携した実験小建築(彫刻的なフォリー等)で公開され、市民に開かれた施設となればと思います。

これらの、公園や科学技術、駅など様々なものが集約するエリアを、芸術的な視点も含めてコントロールすることで、県外や海外に向けて「まちの顔」として発信力を持つと考えます。そして、市民に愛着のある場所として認知されることは防災拠点としての重要であり、単なる避難場所だけではなく非常食、設備等を常備する施設も整備することで、災害に強いまちづくりができると考えます。

しかし、ここで大切なのは、多くの市民が、様々な関わり方で、持続的に利用する「青い森セントラルパーク」で、「コミュニケーション」が育まれることです。非常時をお互いに支え合う強い心こそが、「本当に強いまち」であることを、これからも忘れずにいきたいと思っています。